a wonderful world

ペケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａ　ｗｏｎｄｅｒｆｕｌ　ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ２４３４Ｅ

【作者名】
ペケ

【あらすじ】
もしも自分を必要としてくれる誰かがいたら、辛くても、生きていけるかもしれない。例えそれが単なる自己満足に過ぎないものだとしても・・・。これはそんな、少年と死神のお話。

あの世ってのは、もっと暗い所だと思っていた。
だがオレのいる所は光に包まれていて、上も下も横も真っ白だった。
「オレは…死んだのか？」
独り言なんかじゃない。オレは、オレの横に立っている『そいつ』に訊いたんだ。
そいつは男か女か分からない中性的な顔立ちをしていて、シャツにジーンズというラフな格好をしていた。その手には、拳銃があった。
「死ねたんだな？」
「そう」
そいつは答えた。えらく平坦な、生気のない声だ。
「あんたは？」
「死神」
「…本当に？」
「知らない」
何を言ってるんだ、こいつは。
オレは何を話せばいいのか分からなくなり、そいつとの会話を諦めた。なんだかどうでもよくなってきていた。
死んでも変わっていないようだな、オレは。

そうだ、オレは死んだんだ。
オレはそいつに言った。
「早く連れて行ってくれ」
「どこに？」
そいつはとぼけた。
「どこにって、あの世だよ。それがあんたの仕事じゃないのか？」
「そう」

「じゃあそうしてくれ」
「できない」
「何故？」
そいつはオレの目を真っ直ぐ見つめてきた。オレは反射的に目を逸らした。
「あなたはまだ完全に死んでいない」
無機質、という言葉が似合う声だ。
「あなたの死を望まないものがいる。彼女の強すぎる思いがあなたをここに繋ぎ止めている」
「…そんな奴、いるわけねえ」
「いる」
オレは考えた。だがそんな奴、思い付かなかった。
「断ち切ることもできる」
声を変えることなく、そいつは言った。
「そうすればあなたは完全に死ぬことができる」
しかし、とそいつは続けた。
「戻ることもできる」
正直、迷った。
オレを思っている人間がいる。そんなバカな、と思った。だが…。
オレはそいつの目を見た。深すぎて、底が見えなかった。
「…分かった」
オレは言った。自らの意志で。
そいつは頷くと、その細い手に似つかわしくない、黒い拳銃をこっちに向けた。
「…」
死神は何も言わずに引き金を引いた。
オレはバカみたいな悲鳴を上げた。

気付くとオレはベッドの上にいた。そしてバカみたいな声を上げて

跳ね起きていた。
あれは夢だったのだろうか？いや、そうは思えない。
カレンダーに目をやる。間違いなくオレが死んだ日だった。
「…死んだくせに」
そう呟いた。

学校に行くかどうか迷ったが、あいつの言葉を信じて、行ってみることにした。だが、オレは学校が近付くにつれて、それを後悔し始めていた。胃がキリキリし始め、ひどく気が滅入った。
学校にいると、自分は他人とは違うのではないか？他人みんながオレを自分とは違うと思っているのではないか？そう思えてならなかった。誰かが話をするたびに、自分のことではないかと怯えた。まるで、水の中に、油を落としたような、そんな違和感。
結局、学校が終わるまでオレは誰とも話をしなかった。誰もオレに話し掛けてこなかった。
いつも通りだった。

放課後、屋上に昇ってみたが、そこから飛び降りる勇気はなかった。
オレはあのとき、オレが死んだとき、こんな風に夕日を見ていたんだ。別に大した意味はなかったんだが、ただ、何かの感慨が欲しかったのかもしれない。
なにも学校で死ぬこともなかったが、誰かに覚えておいて欲しかったのだろうか？
「あのときは、勢いでやっちまったからな」
一人で苦笑した。涙が出ているのに気付いた。

…大嫌いだ。

オレは学校をあとにし、一人暮らしをしているアパートのドアを開けた。
すると何かがドアの隙間から出てきて、オレの足にぶつかった。
それはオレの足にすり寄ってきて、ノドをゴロゴロと鳴らした。
「あ…」

「あなたを思っているものがいる」

あいつの声が聞こえた気がした。オレはその日、初めて笑った。
「分かったよ」
オレはドアを思いっ切り開けて、家に入った。
何故かって？
親愛なる同居人に食事を与えるためさ。

（後書き）

ここまで読んでいただき誠にありがとうございます。
主人公の少年が幸せなのか、そうでないのか、それは皆様の判断に任せたいと思います。
それでは、またいずれ・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2434e/

a wonderful world

2010年10月20日19時10分発行